

事務局短信

大会まで既に一ヶ月足らずである。あわてて報告要旨を掲載する特輯号の発行にこぎつけた。中央大学の夏休みが八・九月であることも何か仕事のテンポを狂わせている。

最近の農業・農村理論の混迷に警鐘をなすごとく著作集が続々と企画・刊行されてゐる。『井上晴丸著作集』、『栗原百寿著作集』、『近藤康男著作集』、『古島敏雄著作集』等々。『栗原百寿著作集』(第一回配本)『農業問題の基礎理論』所収の「付」、農村社会学的風潮と偏向—野呂栄太郎にかゝれー」をみてみると、彼の農業経済学における農村社会学的偏向への批判が、明らかに、山田・平野理論の旧講座派に系譜するとする改革後の再編地主制論に向けられてゐることが分るが、同時に、その風潮を、「戦後ににおけるアメリカ科学の風潮」といふことに帰れ」、近代経済学の隆盛とおなじく日本経済の國家独占資本主義的路線にもとづくものとしている(「農業経済学と農村社会学」)。どうもこの辺にも何か栗原理論に首尾一貫しないものが感じられてならない。

ともあれ、このような著作集刊行ブームを糧として何がうみだされてくるか期すべきものであろう。

